努力賞

スポーツダイジェスト番組
「熱闘甲子園」のテクスト分析
～テレビは高校野球をどう伝えてきたか～

学　　年：４年
学部学科：人間科学部人間科学科
氏　　名：篠崎　祐太

要　約

1. 研究の目的と方法

本研究では、テレビというメディアが高校野球という「国民的なイベント」をどのような物語として伝えられているのかについて明らかにした。先行研究の検討を踏まえて、テレビ番組の中でも、より高校野球という物語に意味を込めやすいダイジェスト番組の『熱闘甲子園』を分析対象としている。

この『熱闘甲子園』の分析は、2009年に加藤がすでに行っている。そこで、今回は加藤の分析方法と同様の方法で分析を行うことで、この10年間でメディアの高校野球の伝え方を比較して考察することを試みた。

2. 結果

マクロ分析では、①チームの特徴（自主性）、②チームの特徴（伝統）③選手の特徴（個性）、④選手の成長、⑤選手のサポートという主に５つのキーワードで各試合のダイジェストがつくられていることがわかった。

メゾ分析からは、１）高校生らしさ　２）甲子園の特別感　３）甲子園の歴史　４）応援する人との一体感の４つの視点でダイジェストがつくられていることを指摘できた。

最後にミクロ分析という手法からは、大阪桐蔭主将の中川が、この１年間で主将として成長してきたことを、特に後半部分ではバストショットやアイレベルショットを多く用いることで強調され、そのようなカットに合わせたナレーションによって、より視聴者に選手の成長を伝えようとする内容になっていた。

3. 考察

本研究の変わらない高校野球の価値としては「高校生らしさ」が挙げられる。また、「一体感」というキーワードも変わらず出てきた言葉である。「一体感」でも、兄弟や両親との絆や、先輩・後輩の絆や、そこからの成長の物語のように、より個人に焦点があてられる傾向が増えてきた。これは10年前の加藤の分析から続く傾向であった。

今大会の特有の切り口という点では２つのことが指摘できた。１つは、個人に焦点があてられる傾向がつづくなかで、選手たちの成長物語のキーワードとして「自主性」がキーとなっていた点が指摘できた。もう１点、2018年の大会で目立ったのは「甲子園の歴史」や「甲子園の特別観」である。これは今回が100回目の記念大会であったことも影響しているのではないだろうか。

4. 今後の課題

本研究は様々な視点からテクストを分析する方法を選んだ。しかし、その分析を行いながら、果たして視聴者はこの複雑なテクストを、どのように視聴しているのかに関心を持つようになった。ツイッター等のSNSへの投稿を分析するなど、テレビ番組を視聴者がどのように理解をしているかについて、検討することは今後の課題である。

目　次

1.　研究の背景

1-1.　高校野球（夏の甲子園）の歴史

1-2.　スポーツとメディアの関わり

2.　研究の目的と方法

2-1.　先行研究の検討

2-2.　研究の目的

2-3.　研究の方法

3.　分析結果

3-1.　マクロ分析　～番組冒頭のタイトル分析～

3-2.　メゾ分析　　～司会者の語り～

3-3.　ミクロ分析　～ショット・アングル・ナレーション分析～

4.　結果と考察

4-1.　結果のまとめ

4-2.　考察

5.　今後の課題

参考資料一覧

1．研究の背景

1－1．高校野球（夏の甲子園）の歴史

2018 年夏、全国高等学校野球選手権大会は第 100 回大会を迎え、北大阪代表大阪桐蔭が史上初の 2 度目の春夏連覇を達成し、幕を閉じた。この夏の高校野球大会は、1915 年に第 1 回 全国中等学校優勝野球大会として豊中球場で始まった。当時は東北、東海、京津、関西、兵庫、山陽、山陰、四国、九州の 9 地区の代表校と春の東京大会優勝校の計 10 校の代表[1]で戦われた。その後、戦争の影響で開催がされない期間をはさみながらも、2018 年に第 100 回記念大会として過去最多の全国 56 校の代表が集まった。およそ 100 年の歴史を経て、現在では「夏の風物詩」とも呼ばれるほど野球ファンだけでなく、日本中が注目する大会となった。高校野球大会がこれほど注目されるようになった背景には、主催が春は毎日新聞、夏は朝日新聞であることや、全試合を NHK で全国中継されるなど、メディアとの関わりが大きな要因になったと筆者は考えた。

1－2．スポーツとメディアの関わり

そこで、ここではスポーツとメディアの歴史をまとめた。スポーツとメディアが最初にかかわりを持ったのは活字メディアの新聞であった。新聞は明治時代の中頃からスポーツ関係の報道を扱うようになり、明治時代の後半からが自らが各種のスポーツイベントを主催するようになっていった。例えば、時事新報社は 1901 年東京上野不忍池 12 時間競争を開催したことをはじまりに、朝日新聞は 1915 年に全国中等学校優勝野球大会を、毎日新聞は 1918 年に日本フットボール優勝大会を主催するなど、各社が競い合ってスポーツ事業の主催・後援を行うようになった。このようなスポーツと新聞社との関係は、「スポーツの普及過程にメディアが大きな役割を果たしたこと、一方でメディアにとっても発行部数の拡大にスポーツが一定の役割を果たしたことの両面を示」[2]していると指摘された。

以降、1925 年にはラジオ放送が開始され、1953 年にはテレビが本放送をはじめた。そこでも、メディアとスポーツはより深く結びつき、私たちはテレビを中心としたメディアを通してスポーツに触れることとなる。現在ではメディアの発展により、私たちの多くは直接スポーツを観戦する機会よりも、テレビなどのメディアを通してスポーツを視聴する機会の方が多い。そして、メディアは「媒体」と訳されるとおり、スポーツ現場と私たちの間に存在するものである。メディアは何かしらの「想い」や、「物語」といったメディアが伝えたい「意味」を付与して伝えていると筆者は考えた。

本研究では、テレビというメディアが高校野球という「国民的なイベント」をどのような物語として、伝えられているのかについて明らかにしていきたい。

1）公益財団法人日本高等学校野球連盟 HP、「大会小史」、http://www.jhbf.or.jp/sensyuken/history/（最終閲覧日 2018 年 10 月 4 日）
2）宮内孝知、「スポーツとメディア」、『教養としてのスポーツ科学』、大修館書店、2003 、p 18

2. 研究の目的と方法

2-1. 先行研究の検討

メディアに関する研究には、テレビ局や新聞社などの情報の「送り手」を分析する方法、テレビや新聞が伝える情報を視聴者がどのように理解しているか、「読み手」を対象に分析する方法、そして、テレビ番組や新聞記事といった「テクスト」を分析する方法の3つに大きく分けられる。本研究では、テレビ番組の内容について分析することを考えているので、ここではスポーツ記事や、番組、映画等を分析した先行研究について検討を行った。

田島（2004）は2002年に行われたFIFAワールドカップ日韓大会における、日本代表の試合について、全国紙の報道をテクスト分析した。そこでは、「成功に向かって苦しみを乗り越えて努力する」[3)]、という近代的価値観の枠組みでスポーツを伝えられていることが示された。また、桝本(2000)はスポーツ映画のテクスト分析を行った。桝本は、スポーツ映画から流れるスポーツのイメージをスポーツの象徴的意味として解釈し、明るみに出すことを目指した。オリンピックの公式記録映画「オリンピア」、「東京オリンピック」をもとに分析した結果、「映画を通して「達成」、「卓越」、「自己完成」といった向上心という価値観を表現していること」[4)] を明らかにしている。

以上の研究からも、メディアはスポーツを伝えるときに、何らかの意味を付与しつつ、記事や映像が作られていくことが分かる。では、本研究で分析するテレビが高校野球をどのように伝えたのかについて取り組まれた研究はどのようなものがあるか、以下にまとめた。

代表的な研究としては、清水（1998）がある。清水は1986年の第68回夏の高校野球大会において、NHKで放送された準決勝戦と決勝戦の実況中継を記号論の方法を用いて分析した。主にアナウンサーの語りから、「「全員一丸」、「アルプスの乙女」、「応援団と選手の一体感」、「記録」、「勝敗にかかわらず、あきらめないで努力すること」など10のキーワードを抽出した。特に決勝戦では、「気迫、精神力」の強調、それまでの対戦校がアルプスに応援に駆けつけてくれたことによる若者同士の「友情」や「一体感」、「地元での盛り上がり」」[5)] が強調されて伝えられていた。つまり、以上のような意味を伝える物語として高校野球というスポーツ中継が伝えられているということが言える。

清水の研究は1986年の試合の実況中継を分析したものだが、2008年に高校野球のダイジェスト番組『熱闘甲子園』を題材に分析を行った加藤（2009）の研究がある。加藤は、清水と同様に高校野球のテレビ番組に意味付与された物語は、どのようなものかを明らかにした。その結果は、全体的には清水が分析した「伝統的ともいえる甲子園野球像をふまえつつも、一方で個性的な選手を取り上げているものや、兄弟や親子の絆を描いたもの、

3）田島良輝、「全国紙が構築したスポーツの価値」、『社会学が拓く人間科学の地平』、五絃舎、2005 、p 110
4）桝本直文、『スポーツ映像のエピステーメー―文化解釈学の視点から―』、新評論、2000 、p 276 - 278
5）清水諭、『甲子園野球のアルケオロジー―スポーツの「物語」・メディア・身体文化―』、新評論、1998 、p 38 、p 50

努力賞(1)

あるいは選手個人の成長を描いたものなど、比較的新しいと思われるプロット」[6]があることを指摘した。また、より詳しいアナウンサーの語りに関する分析を通して、「『熱闘甲子園』における司会者の役割は、伝統的な甲子園物語を経由させつつ、試合ダイジェスト－人間関係を軸にした新しい「物語」へといざなう性質を持っている」[7]と指摘し、1980年代は主流であった「勝利」や「団結」の物語より、より個人的な人間関係のあり方を伝えるのが、2000年代の特徴であるとした。

加藤（2009）は、ダイジェスト番組とは「試合当日に放映される試合結果の要約」[8]だという。実況中継よりは編集に時間がかけられているため、事前の取材がダイジェスト番組の内容に反映されていく。それゆえ、「ダイジェスト番組には試合そのもの以外の物語が、様々なかたちで反映されている」とも指摘する。

2－2．研究の目的

研究の背景において、本研究では、テレビというメディアが高校野球という「国民的なイベント」をどのような物語として伝えられているのかについて明らかにしていきたいと書いた。さらに、先行研究の検討を踏まえて、テレビ番組の中でもより高校野球という物語に意味を込めやすいダイジェスト番組の『熱闘甲子園』を分析対象とした。

この『熱闘甲子園』の分析は、2009年に加藤がすでに行っている。そこで、今回は加藤の分析方法と同様の方法で分析を行い、テレビというメディアが『熱闘甲子園』というダイジェスト番組を通して、どのような意味の物語を伝えようとしているのかを明らかにしていきたい。特に、加藤の方法と同じ方法を用いることで、この10年間でメディアの伝え方はどのように変わったのかを比較して考察できればと考えている。

2－3．研究の方法

分析の方法は、加藤（2009）と同様の方法で行った。

加藤は、『熱闘甲子園』というダイジェスト番組をマクロ、メゾ、ミクロと呼ぶ3つの切り口で分析を行った。以下にそれぞれの分析の手順を記した。

1）熱闘甲子園について

熱闘甲子園とは全国高等学校野球選手権大会（夏の甲子園）期間中に放送される同大会のダイジェスト番組のことで、朝日放送テレビとテレビ朝日の共同制作により試合当日の夜に全国放送される30分番組のことである。主に当日の試合が4試合ある日だと、大体1試合のダイジェストにかける時間は3～4分、それに番組独自のオリジナルコンテンツ

6）加藤徹郎、「筋書きのないドラマの「語り」を探る」、『プロセスが見えるメディア分析入門』、世界思想社、2009、p 33
7）同上 6）、p 34
8）同上 6）7）、p 12

が同じく3～4分ほど挿入される。2018年の第100回記念大会では、男性キャスターが独自取材をした「相言葉～相葉雅紀が見た夏～」がシリーズ化されていた。

2）分析方法

マクロ分析

この番組では、大会で行われたすべての試合のダイジェストを報道する。2018年度は記念大会ということもあり、55試合が行われ、このすべて55試合のダイジェストが番組で報道された。

マクロ分析では、すべての試合の①事前特集の高校名 ②タイトル ③キャスト（登場人物）④プロット（物語のキー）をまとめて、全体を通してどのような視点でダイジェストが構築されているかを分析する。

メゾ分析

メゾ分析は番組司会者の「語り」に焦点を当てる。熱闘甲子園の司会者は、試合の解説というよりはVTRの前後で試合の見所を案内する役割を担う。この司会者のコメントをすべて書き出し、書きだした一覧の中から、よく用いられるキーワードをまとめた。さらに、キーワードが使われている前後のコメントを検討することで、番組がどのような「道筋」で視聴者に高校野球を伝えようとしているのかを分析する。

ミクロ分析

ミクロ分析はある一試合に焦点を当て、①試合をカットごとに分ける そして②カットごとの概要、フレームサイズとアングルというカメラの撮り方や位置 ③②の各場面でのナレーション音声 を一覧表としてまとめる。

ひとつひとつのカットにおけるカメラの位置や動き（映像）とナレーション（音声）との関係を分析することで、メディアが何を強調しようとしているのか明らかにする。

以上のマクロ・メゾ・ミクロと複数の視点でダイジェスト番組を分析することで、高校野球がどのような意味を与えられつつ、報道されているのか詳しく明らかにできると考えている。

努力賞(1)

3．分析結果

3－1．マクロ分析　～番組冒頭のタイトル分析～

表 1. マクロ分析

回	試合(コンテンツ)	取材校	タイトル	キャスト	プロット
1	藤蔭×星稜	星稜	松井秀喜に憧れるキャプテン 運命の再会を引き当てた男	星稜3年 キャプテン	注目選手(運命)
1	夏跡#1	藤蔭	元エースを甲子園のマウンドに (怪我で予選はベンチ外、甲子園で先発)	#1市川晃大 #10吉村紘輝	——
1	済美×中央学院	済美	自ら選手をやめたマネジャー 皆を支える"太陽の声"	済美3年記録員 向井太陽	サポート
1	慶応×中越	慶応	四字熟語で挑む夏 ~敗者が再び勢いを!慶応"捲土重来"の夏~	慶応	チーム
1	#1相言葉~相葉雅紀が見た夏~	—	100回目の夏 主役、脇を固める人たち	皆で支えあい、造りあっている	——
2	山梨学院×高知商	—	壮絶な打撃戦を制するのは	両チームダイジェスト	両チーム
2	夏跡#2	山梨学院	熱き信念が後輩たちの道しるべ	山梨学院4番 中尾勇介	——
2	作新学院×大阪桐蔭	大阪桐蔭	去年の涙を糧に 受け継がれし"主将力"	大阪桐蔭主将 中川卓也	選手の成長
2	北照×沖学園	北照	サイクル安打男 夏の甲子園初勝利を	北照4番 岡崎翔太	注目選手
2	旭川大×佐久長聖	—	夏の高校野球史上初の展開 逆転に次ぐ逆転…結末は！?	両チームダイジェスト	両チーム

表１．は、マクロ分析の結果の一部である。試合は全部で 55 試合あったので、実際の分析では、全 55 試合の一覧表を作成して分析している。

分析の結果、①チームの特徴（自主性）、②チームの特徴（伝統）③選手の特徴（個性）、④選手の成長、⑤選手のサポートという主に 5 つのキーワードで各試合のダイジェストがつくられていることがわかった。

①チームの特徴（自主性）では、常葉大菊川や慶応のような個性的なチームづくりを行う高校が取り上げられる。例えば、常葉大菊川はノーサインで選手たちが自ら考えることを促す特徴的なチームであり、慶応は「四字熟語で挑む夏」とタイトルにあるように、試合毎に四字熟語でテーマを掲げ、そのテーマをもとに戦うように、どちらも「自主性」がチームづくりのキーワードという特徴がある。

②チームの特徴（伝統）としては、龍谷大平安、横浜、日大三高の試合が挙げられる。平安は 100 回大会で 100 勝の記録を目指す、横浜は 20 年前に全国優勝を果たしそれ以来の優勝を目指すチームとして、日大三は伝統の強打として、それぞれチームが培ってきた伝統をチームの特色として特集が作り上げられていた。

③選手の特徴（個性）に焦点をあてたものとしては、創志学園のエースのガッツポーズや、丸亀城西の「笑顔のエース チームのために」という特集がそれにあたる。他には、チームの主軸、頼られる存在、キャプテンをキャストにしたものもこのカテゴリーに多い。

④甲子園での高校生の成長を描いた物語も多く占めていた。

⑤選手のサポートは、「支える」というキーワードと共に登場することが多い。第 100 回大会という言葉と合わせて使用されることも多く、周りの人たちの支えが伝統を受け継いできたとの視点で取材される傾向が示唆された。番組独自のオリジナルコンテンツとし

て、相葉雅紀による「相言葉～相葉雅紀が見た夏～」[9] が大会を支える人たちに注目し取材していたことが、その象徴といえる。「支える」について、もう少し詳しくみてみると、「ベンチからサポートする選手の友情」（例えば1日目第2試合）、「アルプスや地元からの応援によるサポート」（例えば5日目第4試合）、また「選手をサポートする家族、支える人たち」（例えば10日目第1試合）というパタンがあることを分析できた。

3－2．メゾ分析　～司会者の語り～

メゾ分析では司会者の語りに焦点をあて、どのような「道筋」で視聴者に高校野球を伝えようとしているのかを分析した。

第100回大会では、元プロ野球選手の古田敦也、朝日放送アナウンサーのヒロド歩美、特別ゲストの相葉雅紀、この3人が司会者として番組を進行した。彼（女）の語りを分析することで、1）高校生らしさについての語り　2）甲子園の特別感についての語り　3）甲子園の歴史についての語り　4）応援する人との一体感についての語りの4つの視点でダイジェストがつくられていることが指摘できた。

1）高校生らしさについての語り

マクロ分析では、選手個人をクローズアップされているのが比較的多くみられたが、チームについての語りがメゾ分析では多くみられた。

例：『甲子園に来るチームっていうのはどこもそうなんですけど、一球を大切にする姿勢っていうのがあるんですよね』（第5回）
例：『今年の金足農業は諦めない心が強かったから野球の神様が微笑んでくれたんじゃないでそうか』（第15回）

司会者のコメントからは、*「一球を大切にする姿勢」*や*「諦めない心」*という言葉が多く語られた。その前後の特集映像と合わせて考えると、高校野球とはどのチームも試合が終了するまで諦めずに全力で戦っているという語りが強調される。高校野球らしさとは全力で戦うこと、最後まで諦めない姿勢であること、という意味を付与してテレビは伝えようとしているのではないかと考えた。

9）本大会の特別ゲストとして、人気アイドルグループ嵐の相葉雅紀が出演している。このように特別司会者がいることは珍しく、100回大会だからだともいえる。その相葉氏が取材を行った特集、「相言葉～相葉雅紀が見た夏～」では、甲子園のグラウンド整備や校旗掲揚を担当者など、縁の下の力持ちとして大会運営を支える人を取り上げている。

2）甲子園の特別感についての語り

例：『我々が想像することをどんどん超えていくのがこの甲子園であって高校野球なんですかね』（第13回）
例：『まさに甲子園と言いますか最後の最後まで分からないほんとにいいゲームだったですよね』（第2回）

次に「想像することを超えていく」や「最後の最後までわからない」と言うキーワードが抽出された。ここも、それから続く特集映像から考え、誰も想像することのできない、筋書きのないドラマを強調する語りであることが分かった。「甲子園には魔物がいる」という時に用いられる語りも、甲子園の特別感を強調する語りの一つであると考えている。

3）甲子園の歴史についての語り

例：『こういった周りの色々な支えがあって、高校野球っていうのは100回の歴史を積み重ねてきたのだと開会式を見て改めて感じました』（第1回）
例：『100年以上経った今でも確かに、人を育てるための野球、その精神が変わることなく受け継がれています』（第11回）

「100回の歴史の積み重ね」、「変わることなく受け継がれている」というような、甲子園の歴史を強調するフレーズも多く使用されていた。100年経った今でも過去と変わることなく伝統を受け継いでおり、多くの支えがありながら、現在まで長く続いている。また、この先も長く伝統を受け継いでいく、そんな大会にしていきたいという方向でのコメントがここに該当する。

4）応援する人との一体感についての語り

例：『100回目の甲子園は史上初100万人を超える観衆が詰めかけましたね』（第16回）
例：『アルプスだけではなく球場がひとつになっていましたね』（第15回）
例：『地元の方の声援が暖かくて、本当に頑張れるって言っていたんですよね』（第13回）

「史上初100万人を超える観衆」と高校野球大会は本来高校生の全国大会ではあるが、現在は非常に、多くの人に注目されている大会であることが強調される。

そして、そのスタンドとグランドが一体になっていること（「アルプスだけではなく球場がひとつ」）や、「地元の方の声援」の語りにあるように、地元を含めて応援する人たちと全員で戦っていることが強調される。選手と観客が一体化する場こそが、甲子園であるというイメージがここでつくられていく。

3－3．ミクロ分析　～ショット・アングル・ナレーション分析～

ミクロ分析では、実際の試合のダイジェストを用いてナレーションや映像[10)]を分析していく。そこで今大会では第2日目の大阪桐蔭×作新学院の1回戦を対象に分析を行った。この試合を分析対象として選択した理由は、本大会において、大阪桐蔭は史上初の2度目の春夏連覇を目指しており、無類の強さを誇るチームである。全国でも屈指の強豪チームであり、最強世代ともいわれるタレントぞろいのチームが、甲子園大会においてどのような切り口で描かれるかを明らかにするために、この試合を対象とした。

表2、ミクロ分析一覧の一部である。この試合のダイジェストのカット数は全75カットある。カットとは、ある映像が次の映像に切り替わるまでの間をカットと呼んでいる。分析の手順は、タイトル「去年の悔しさを糧に　受け継がれし“主将力”」より、特に強調されるカットをみつける。そのカットでは、どのような映像（フレームサイズやアングル）がつくられ、どのような音声（ナレーション）が語られているのかを分析する。これらの分析をすることで、テレビが視聴者に何をどのように伝えようとしているのかが、明らかにできると考えた。

このダイジェストの主役は、大阪桐蔭の主将中川である。昨年（2017年）の大会で大阪桐蔭は、3回戦で敗退した。当時2年でファーストを守っていた中川は、勝利まであとアウトひとつのところでファーストベースを踏み外すというミスを犯した。その後、チームは逆転を許し、春夏連覇を逃したという過去があった。その時に中川を救ってくれたのが、当時のキャプテン福井であった。託されたのが、バッティンググローブと帽子に書いてくれた「主将力、キャプテンでチームは変わる」という言葉であった。

努力賞(1)

10）フレームサイズ：カメラのフレームにどのくらいのサイズで人物を入れるかの選択
L（ロングショット）：風景・背景に人物が入るショット
F（フルショット）：人物の全身がフレームに収まったショット
M（ミディアムショット）：人物のヒザまたは腰から上にフレームが収まったショット
B（バストショット）：人物の胸から上にフレームが収まったショット
CU（クローズアップ）：人物の顔がフレームに収まったショット
アングル：カメラが対象をとらえる角度
H（ハイアングル）：対象を上空から　E（アイレベルショット）：対象と水平
L（ローアングル）：対象を下から
ナレーション
Na: ダイジェストのナレーター　Nb: 実況中継のナレーター

表 2. ショット・アングル・ナレーション分析(序盤)

№.	概要	フレームサイズ	アングル	ナレーション
1	一塁ベース	CU	L	Na：去年の悔しさを糧に史上初 2 度目の春夏
2	守備位置につく中川くん	M	E	連覇へ
3	作新高校ベンチ前試合前素振り	M	E	対するは一昨年の優勝校作新学院
4	打席に立つ中川くん	M	E	一回、先輩の手袋で打席にたった大阪桐蔭のキ
				ャプテン三番中川。
5	打ち取られた中川くん	M	E	Nb：ファーストライナー早い打球
6	作新エース高山くん	M	E	Na：作新学院のエース高山に撃ち取られるも
7	中川くん根尾くんに伝える	M	E	すぐさま仲間の元へ。自ら体感したことを伝え
8	大阪桐蔭ベンチ前円陣	L	H	る。
9	円陣で声掛けする中川	M	E	二回の攻撃前エンジンを組んで気合い注入。

表 3. ショット・アングル・ナレーション分析(終盤)

№	概要	フレームサイズ	アングル	ナレーション
48	作新 1 人生還	F	E	Nb：9 回 2 アウトから大阪桐蔭に 1 点を返すタ
49	作新アルプス応援	B	E	イムリーヒット
50	守備位置につく中川から声掛け	B	E	Na：去年最後のマウンドには柿木がいた。
	→柿木	B	E	
51	柿木投げる→デッドボール	L	E	
52	柿木顔をしかめる	B	E	
53	中川ベンチを見る	B	E	Na：ここで中川が声をかける。
54	マウンドに集まる	L	H	中川：アップアップになっているかと思って冗
55	マウンドに集まる→散らばる	M	E	談半分で「お前の弱さやぞ」と言った。
56	中川守備位置に戻る	M	E	Na：これも先輩から受け継いだ主将力。
57	1 塁ランナー→2 塁ランナー	L	E	Na：9 回 2 アウト
58	打席に立つ作新石井	M→B	E	
59	柿木投げる→高めに浮く	L	E	
60	柿木顔をしかめる	B	E	
61	中川笑顔で声掛け	B	E	
62	作新アルプス応援	L	E	
63	作新ベンチ応援	B	E	
64	作新バッター	B	E	
65	柿木投球動作	M→CU	E	
66	中川	F→B	E	
67	柿木投げる→打つ	L	E	
68	柿木打球を目で追う	CU	E	
69	バッター打球を目で追う	B	E	
70	作新ベンチ打球を目で追う	L	E	
71	中川打球を目で追う	M	E	
72	伸びる打球	L	L	
73	レフトフライ	F	H	
74	柿木　安心	M	E	Na：大阪桐蔭
75	試合後礼　中川	B	E	先輩たちが果たせなかった夢、まず 1 勝

以上の背景をふまえて、前半部分と後半部分に分けて、それぞれカットの分析を行う。

まずはNo. 1、一塁ベースのクローズアップからはじまる。そこに「去年の悔しさを糧に史上初２度目の春夏連覇へ」というナレーションが入る。このシーンは中川の昨年の悔しさを象徴的に表しているといえる。次にNo. 4のシーンである。中川の打席のミディアムショット（腰から上を画面に収めたもの）に「一回、先輩の手袋で打席にたった大阪桐蔭のキャプテン三番中川」というナレーションが重なる。先輩の思いも背負い、春夏連覇に向けての意気込みを感じさせられる場面である。No. 9では円陣で声掛けする中川のミディアムショットが映る。そこに「二回の攻撃前エンジンを組んで気合い注入」のナレーションが入る。このシーンでは、大阪桐蔭の主将としての役割を全うし、中川の成長が描かれているシーンであった。

次の表３は、試合終盤のカットまとめたものである。９回２アウトからのカットだけで、全75カット中33カットと約半数を占めた。この試合はスコアが３-１であったこともあり、緊迫した終盤にはカット数が細かくなっており、より緊張感が伝わる構成になっていた。また、バストショットが多いことも、選手の緊張感や表情が伝わるカットになっていた。No. 50に守備位置につく中川から柿木に声を掛けるシーンがある。そこに「去年最後のマウンドには柿木がいた」とナレーションが入り、去年の敗戦を思い起こさせる。注目したいのはNo. 51 ～ No. 56のシーンである。柿木がデッドボールを与え、ピンチを迎えた場面で大阪桐蔭がマウンドに集まる。「中川が声を掛ける」「これも先輩から受け継いだ主将力」とナレーションがあり、中川の声掛けが、昨年から成長した姿を象徴的に表しているシーンとなっていた。

大阪桐蔭主将の中川が、この１年間で主将として成長してきたことを、特に後半部分ではバストショットやアイレベルショットを多く用いることで強調され、そのようなカットに合わせたナレーションによって、より視聴者に選手の成長を伝えようとする内容になっていた。

努力賞（1）

４. 結果と考察

４-１. 結果のまとめ

テレビが高校野球にどのような意味を付与して伝えようとしているのかについて、加藤が実施した『熱闘甲子園』のテクスト分析の手法を用いて分析を行った。

マクロ分析では、①チームの特徴（自主性）、②チームの特徴（伝統）③選手の特徴（個性）、④選手の成長、⑤選手のサポートという主に５つのキーワードで各試合のダイジェストがつくられていることがわかった。

メゾ分析からは、1）高校生らしさ　2）甲子園の特別感　3）甲子園の歴史　4）応援する人との一体感の４つの視点でダイジェストがつくられていることを指摘できた。

最後にミクロ分析という手法からは、大阪桐蔭主将の中川が、この1年間で主将として成長してきたことを、特に後半部分ではバストショットやアイレベルショットを多く用いることで強調され、そのようなカットに合わせたナレーションによって、より視聴者に選手の成長を伝えようとする内容になっていた。

4-2. 考察

先行研究でも述べたが、清水は1986年の第68回夏の高校野球大会において分析を行った結果、「全員一丸」、「アルプスの乙女」、「応援団と選手の一体感」、「記録」、「勝敗にかかわらず、あきらめないで努力すること」、「気迫、精神力」、「友情」、「一体感」、「エラー」、「地元での盛り上がり」、の10のキーワードを抽出した。

また、加藤は2008年の第90回大会の熱闘甲子園を対象に分析した結果、清水が指摘した伝統的な高校野球像である「全員一丸」という集団という視点での切り口や、「アルプスの乙女」というジェンダーの問題とも関係するような表現は少なくなり、「友情」や「応援団と選手の一体感」など、より個人的な絆を伝えようとする表現が多くなっていることを指摘した。では、清水の分析から22年、加藤の分析から10年がたった2018年のテレビが伝えた高校野球はどのように変わったのか、あるいは変わらなかったのだろうか。

変わらない高校野球の価値としては「高校生らしさ」が挙げられる。ここで言う高校生らしさとは、清水の「勝敗にかかわらず、あきらめないで努力すること」や、今回のメゾ分析での「諦めない心」が高校生らしさ、高校野球らしさとして、時代が変わっても変わらずに描かれていた。

また、「一体感」というキーワードも変わらず出てきた言葉である。ただし、加藤も指摘するように集団的な視点からより個人的な視点で語りや特集が組まれる傾向にあり、同じ「一体感」でも、兄弟や両親との絆や、先輩・後輩の絆や、そこからの成長の物語のように、より個人に焦点があてられる傾向が増えてきた。これは10年前の加藤の分析から続く傾向であった。

では、今回特有の切り口という点では2つのことが指摘できた。1つは、個人に焦点があてられる傾向がつづくなかで、選手たちの成長物語のキーワードとして「自主性」がキーとなっていた点が指摘できた。森田（2007）は、メディアは「社会で主流のイデオロギーを伝えている」[11] と述べるが、2018年の時点で"自主性"や"主体性"を持った人は、就職でも求められているように、社会で求められる人材である。今の社会を反映しているキーワードとして「自主性」が使用されたのではないだろうか。もう1点、2018年の大会で目立ったのは「甲子園の歴史」や「甲子園の特別観」である。これは今回が100回目の記念大会であったことも影響しているだろう。

11）森田浩之、『スポーツニュースは恐い　刷り込まれる<日本人>』、生活者新書、2007、p 14

5． 今後の課題

本研究では､テレビ番組というテクストを分析するという方法で分析を行った｡ダイジェスト番組『熱闘甲子園』のタイトルを書き写し、司会者の語りを文字起こしして、特集部分のカメラワークとナレーションをひとつひとつ丁寧に分析するなど、できるだけ様々な視点からテクストを分析する方法を選んだ。しかし、その分析を行いながら、果たして視聴者はこの複雑なテクストを、どのように視聴しているのかに関心を持つようになった。ツイッター等のSNSへの投稿を分析するなど、テレビ番組を視聴者がどのように理解をしているかについて、検討することは今後の課題である。

参考資料一覧

参考にしたHP

・ 公益財団法人日本高等学校野球連盟、「大会小史」、
 http://www.jhbf.or.jp/sensyuken/history/（最終閲覧日 2018 年 10 月 4 日）

参考文献

・ 加藤徹郎、「筋書きのないドラマの「語り」を探る」、『プロセスが見えるメディア分析入門』、世界思想社、2009
・ 桝本直文、『スポーツ映像のエピステーメー―文化解釈学の視点から―』、新評論、2000
・ 宮内孝知、「スポーツとメディア」、『教養としてのスポーツ科学』、大修館書店、2003
・ 森田浩之、『スポーツニュースは恐い―刷り込まれる〈日本人〉』、日本放送出版協会、2007
・ 清水論、『甲子園野球のアルケオロジー―スポーツの「物語」・メディア・身体文化―』、新評論、1998
・ 田島良輝、「全国紙が構築したスポーツの価値」、『社会学が拓く人間科学の地平』、五絃舎、2005